松山高吉のこと

嶋田彩司

1874（明治7）年、キリスト教禁令が撤回された翌年のこと、ひとりの青年がキリスト教に入信した。彼の名は松山高吉（たかよし）、二十歳代の後半であった。明治期日本のキリスト教徒第一世代ともいべき彼はその後、聖書の日本語訳や賛美歌集の編纂などで活躍し、同志社大学などを舞台に当代の高等教育にも貢献する。

さて、そのように明治初～中期のキリスト教伸展の先導役を果たした彼は、じつは入信の直前まで熱心な国学徒（復古神道の信奉者）であった。ゆえに松山の入信は、事象として見る限り、皇国思想にこりかたまつたナショナリストが突如として神の愛を説く普遍的宗教の信仰へと転じたかのごとくであるが、その“転回”にどのような背景があったのか、発表者の関心はその一点にある。

① 松山のキリスト教入信（「故グリーン博士を追懐す」¹⁾）

〔原文〕（グリーンの神戸の居宅を：稿者補）訪ひしは明治五年の二月十九日なりき（略）之れに親交を求めしは異教の国家を害毒せんことを憂ひて其教義を知り其内情を探らんが為なりき 然るに交を重ね親を増すに随ひて博士の清き品性正しき言行は余をして心機一転せしむるに至れり

〔訳文〕グリーン博士の神戸の居宅を尋ねたのは、明治5年の2月19日であった。（略）グリーン博士に親交を求めていったのは、キリスト教という異教が国家に害をなすことを憂いてのことで、教義を知り、内情を探ることが目的であった。ところが、グリーン博士との交わりを重ね、親しくなるにつれて、グリーン博士の人の清潔さと言行の正しさが、私をしてキリスト教の信仰へと向かわせたのだ。

② 松山高吉と国学

松山高吉は1847年に、越後の糸魚川に生まれた。松山家は代々の名家であり、一族には文芸をよくする者が多かった。高吉もまた、幼少の頃より漢学や和歌を学び、国学（平田篤胤門）の本格的な勉学もおさめた。青年時代の日録『旅日記』²⁾には、1869（明治2）年のこととして、次の記述がある。

〔原文〕七月中旬ヨリ白川家学館ニ転寓ス 国事ニ奔走ノ余暇神山四郎ノ塾ニ通テ漢学ヲ修ム 十月廿六日白川千代磨君ト共ニ西京ヲ発シ（略）東京ニ着シ神田橋通白川神祇大副殿ノ邸ニ寄寓ス

〔訳文〕7月中旬より京都の白川家学館に寄寓先を変えた。「国事に奔走」するかたわら、神山四郎の塾で漢学を修めた。10月26日、白川千代磨と共に京都を発って（略）東京に着き神田橋通りの神祇大副宅に寄寓することとなった。

白川家は花山天皇の流れを汲み、代々神祇官をつとめる家柄。皇室祭祀を司る伯家神道の家元で、平田篤胤・鋳胤との関わりも深い。その学舎に住んで、松山は「国事に奔走」したという。その後のくだりに名前のみえる白川千代磨は、この年の7月に神祇大副（長官に次ぐ次官。神祇官は同年に創設された、国家祭祀を管理する機関名）に就任した白川資訓の実弟で、赤報隊に関する史料にも名前がみえる。その人物と行動を共にしていたということは、若き日の松山にも政治的活動の経験があったものと考えてよい。また、上記①の諜報活動も白川家および神祇官との関わりで推測することが可能である（市川栄之助事件）。

③ 国学とはなにか（その1：本居宣長）

国学とは“失われた神道”の復活をめざす学問的な営為であるということが出来る。江戸時代中期、思想界の新潮流のひとつとして、日本古来の正統な神道の復活を提唱する動きがあらわれた。これを復古神道という。そして、復古神道の理論構築のための学問研究を国学という。国学者たちは、古代の日本に儒教や仏教が伝来し、日本人はその思想に毒されてしまい、本来もっていた精神を失ってしまったと考える。そして、失われたその古き良き日本の精神（神道）を今こそ取り戻すべきだ（復古）と主張する。

言い換えればそれは、儒教や仏教による精神支配からの脱却でもある。国学者たちの神道観によれば、仏教や儒教の伝来から江戸時代になるまでの長い間、神道は主として仏教の支配下におかれてきた（本地垂迹）。また江戸時代になってからは、神道は儒教と結びつく（儒家神道）。国学者が企てたのはそのような儒教や仏教による支配からの脱却と自立であった。そしてこのとき、回復すべき日本の精神の象徴として担ぎ出されたのが、『古事記』等の日本神話において世界の統括者として描かれる天照大御神（アマテラス）であり、その子孫としての天皇である。

国学を学問的に大成したと評される本居宣長（1730～1801）は、その主要著書『直毘霊』（1790年）において次のように述べる。ここには日本こそが世界の盟主たるべき国であるという選民意識があらわである。

〔原文〕皇大御国は、掛けまくも可畏き神御祖天照大御神の御生れ坐せる大御国にして、万づの国に勝れたる所由は、先づここに著し。国といふ国に、此の大御神の大御徳み被らぬ国なし。

〔訳文〕我が日本は、神のなかの神である天照大御神がお生まれになった国であり、日本が他のどの国よりも優れている根拠は、天照大御神が日本に生まれたことそれ自体によって明らかである。世界中の他の国はすべてこの天照大御神の恩恵に浴しているのだ。

④ 日の神論争

宣長の思想を痛烈に批判した人物に上田秋成（1734～1809）がいる。宣長との間で交わされた論争（『呵刈菟』所収）の争点は多岐にわたるが、そのひとつにアマテラス神話の優越性を巡るやりとりがある。

上田秋成

[原文] 日神の御事、四海万国を照しますとはいかが。《略》ここに阿乱它国の《略》地球之図といふ物を閲るに《略》吾皇国は《略》ただひろき池の面にささやかなる一葉を散しかけたる如き小嶋なりけり。然るを異国の人に対して、此小嶋こそ万邦に先立て開闢たれ、大世界を臨照まします日月は、ここに現しましし本国也。因て万邦悉く吾国の恩光を被らぬはなし《略》と教ふ共、一国も其言に服せぬのみならず、其如き伝説は吾国にも有て、あの日月は吾国の太古に現はれまししにこそあれと云争んを、誰か截断して事は果すべき。

[訳文] 日の神のこと、世界中を照らしているとはどういうことか。《略》オランダの地球図という物を見れば、日本は大きな池に浮かんだ小さな葉っぱのようなものだ。それなのに、外国人に対して、この小さな島こそもっともはやく開かれたのであり、世界を照らしている太陽や月は、この日本から生まれたのだ。だから世界中の国々が我が国の恩恵を受けている。《略》のだと言っても、誰もそんなことには納得しないどころか、そんな伝説は私の国にもあって、太陽や月は遠い昔、我が国に生まれたのだと主張して言い争いになったとき、果たして誰にどちらが正しいといえるのか。

本居宣長

[原文] 万国の図を見たることをめづらしげにことごとしくいへるもをかし。かの図、今時誰か見ざる者あらん。又皇国のいとしも廣大ならぬこともたれかしらざらん。凡て物の尊卑美悪は形の大小のみによる物にあらず。《略》抑皇国は四海万国の元本宗主たる国にして、幅員のさしも廣大ならざることは《略》必さて宜しかるべき深理のあることなるべし。《略》信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん。《略》正しき古典に載て伝はり来たる古説を、皇国の人としてかくいひおとすべきことかや。

[訳文] 地球の地図を見たことを珍しげに騒ぎ立てるとは愚かではないか。そんな地図を今時見たことがない人間なんていない。また日本の国土がさして大きくないことも皆知っている。ものの価値は大きさだけで決まるものでもないだろう。《略》そもそも我が国は世界の盟主たるべき国であって、国土がたいして大きくないことにも《略》かならずや深い真理が隠されているのだ。《略》信じたい者が信じれば良い。信じないというに人はどうしようもないではないか。《略》由緒ある古典『古事記』に記載されていることなのに、そのように難癖をつけるとは、それでも神の国日本の人間か。

秋成は今日では『雨月物語』の作者として知られるが、宣長の師たる賀茂真淵の系列につながる国学者であった。しかしながら、同じ国学者といっても、日本の古文書の解読に没頭してきた宣長と違って、秋成は中国通俗文学を白話のまま読み書きし、朝鮮通信使と面談した経験もある。今日的な表現を用いるなら、秋成はある意味でリベラルな“国際感覚”を発揮し、宣長の神国日本の絶対化を批判（相対化）して、『古事記』のような古文書は世界の国々のどこにでもあり、それらは等価値であるはずだという。このとき宣長が秋成を論破するためには、世界の国々にそれぞれにある太陽神話のなかでも、日本のアマテラス神話が唯一真性のものであることの説得力ある説明が必要であった。しかし宣長の応答は、「信ぜん人は信ぜよ。信ぜざらん人の信ぜざるは又何事かあらん（信じたい者が信じれば良い。信じないというに人はどうしようもないではないか）」といい、「皇国の人としてかくいひおとすべきことかは（日本人が日本のことを貶めて何になる。それでも日本国民か）」というものであった。もちろん、秋成は日本を貶めようとはしていない。秋成は同じ国学者として、日本に『古事記』があり、そこに記載されたアマテラス伝説を自分は信奉するが、おなじく別の国の人間が自国の歴史書に記載された太陽神話を信じ、自国を世界の盟主と主張することも容認するというに過ぎない。

宣長は秋成の問いかけをずらして、神国日本の優越性について信／不信という次元の議論にすり替えてしまうのである。

⑤ 国学とはなにか（その2：平田篤胤）

平田篤胤は宣長の後継者を自認する。篤胤の国学の最大のテーマは、儒仏以前の古代日本に天皇を中心とする神道国家が確かに存在したこと、そして神国日本が世界の盟主たり得る優越性をもっていることを証明することであった。そして、そのために篤胤がとった方法は、和漢の諸学問はもとよりキリスト教までもを渉猟し、そこから有用なものを自己に都合良く利用（批判的にいうならば“捏造”）するというものであった。

篤胤のキリスト教研究ノートともいうべき著作に『本教外篇』（1806年）³がある。この書の存在については篤胤自身が同書巻頭に「未だ他見を許さず」と書いたことから、ながく秘匿されたままであった。

[原文] 義の為にして窘難を被る者は、これ即ち真福にて、その已に天国を得て処死せざると為るなり、これ、神道の奥妙
[訳文] 義の為に苦難に遭った者は、すなわち真に幸福であって、その者はすでに天国を手に入れて、不死の身となる。これこそ神道の奥義である。

cf. 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである（山上の垂訓）

[原文] 人の靈魂は原より一身の主なり。形骸百体は靈魂の従役なる者なり。《略》形骸は土に帰し、主は自存して滅亡せず、必ず幽世に入りて、幽神のその賞罰を審判することを聴き《略》善人は《略》永々此の国土の幽世に侍はしめて《略》天上に往来しつつ《略》悪人は《略》遂に予美都国に逐はれて《略》懊惱痛哭して永々身に脱せざらむ。

[訳文] 人の靈魂は一身において主であり、肉体は靈魂の従者である。《略》人が死ぬと肉体は土に帰るが、主たる靈魂は存続して、かならず幽世（死者の世界）に入り、幽神（死者の世界を司る神）によって生前の行ないについての審判を聞くこととなる《略》善者は永久にこの国土とともにある幽世にいながら天上世界を往来し《略》悪人は「よもつ国」（黄泉国）に同じ）に追いやられて、永久にそこで苦しむことになる

〔原文〕 外国々に上帝、天帝、梵天王、閻魔王などいひて、種々の事実あるは、大国主大神の分霊。

〔訳文〕 諸外国に上帝、天帝、梵天王、閻魔王などいって、審判をおこなう者がいろいろいるのは、すべて我が国の大国主大神の分身である。

篤胤は大国主大神（最後の審判者）が世界各地に伝播して、上帝や天帝、梵天、閻魔王になったという。それらは、もとは日本古代の神道のなかにあつたものであり、すべて日本で生まれ、それが世界中に伝播した、というのが平田神学の基本構想である。宣長は世界中の神話で日本のものがもっとも真正であるといったが、篤胤にいたってはそもそもすべての起源は日本にあるという。

篤胤の代表作『霊の真柱』（1813年）には次のような記述がある。

〔原文〕 遙か西の極なる国々の古き伝に、世の初発、天神既に天地を造り了りて後に、土塊を二つ丸めて、これを男女の神と化し、その男神の名を安太牟といひ、女神の名を延波といへるが、此二人の神して、国土を生めりといふ説の存るは、全く、皇国の古伝の訛と聞えたり。

〔訳文〕 遙か西方にある国々の古伝に、世界のはじまりの時、主宰神が天地を造り終わったあとで、土まんじゅうを二つ作って、これを男女の神とし、男神を安太牟、女神を延波と名付けたが、この二神が国土を生んだというのは、まったく我が国の古神話（注：イザナキとイザナミ）が誤って伝えられたものである。

国学は儒仏以前の神道を信奉するがゆえに、外来思想・宗教を拒絶し、排撃するような態度をとりつづけた。しかし、それは宣長までの国学の正統であつて、篤胤においては一気に反転し、内外の思想も宗教も総動員されて国粹の神道の“創作”に寄与することとなる。そして、その最たるものが創造主天之御中主である（『本教外篇』）。

〔原文〕 天地万物に大元高祖神あり。御名を天之御中主と申す。始めもなくまた終わりもなく、天上に坐します。天地万物を生ずべき徳を蘊し、為す事なく寂然として（謂ゆる元始の時より高天原に大御坐す）。万有を主宰し玉ふ。

〔訳文〕 天地万物にその大元となる尊い神がいらっしやる。天之御中主という。始めも終わりもなく天上世界にいらっしやる。世界のあらゆるものを生みだす徳を積み、何も行為せぬまま存在されている（いわゆる天地開闢の時から天上世界にいらっしやる神である）。万物の主宰神である。

宣長は『古事記』を唯一の聖典としたが、その『古事記』には天地開闢の記述はない。一方で、『日本書紀』には「天地開闢の時、世界の渾沌は鶏卵のようであつた」という記述がある。これは中国の『淮南子』に依拠した文辞であり、それゆえ宣長は『日本書紀』に依拠することをしなかつた。宣長にとって外国の文典に拠つて神道を説くなどということは外道である。

しかし、平田篤胤はちがう。篤胤にとってすべての古文典の記述は日本の古神道に起源をもつものであつた。だから『淮南子』に出典があつてもなんら差し支へはない。なぜなら、それも日本から伝わつたものだからである。篤胤は『古史成文』（1811年）にも、「古天地未生之時。於天御虚空坐神之神名。天之御中主神（はるか古代に天地がまだ生成していない時に、虚空にいらつしやつた神のお名前は天御中主）」と書いている。

神道は一般に多神教に属すると理解されている。その限りでは、神道とキリスト教の懸隔は大きい。内村鑑三も次のように書いている（『余は如何にして基督教徒となりし乎』）。

新しい信仰の實際的利益はただちに余に明白となつた。〈略〉宇宙には一つの神があるだけである。以前に信じていたように多数一八百万以上でないことを余は教えられた。基督教の唯一神教は余のすべての迷信の根に斧をおろした。

しかし、「多神教としての神道」と「一神教としてのキリスト教」の中間に、平田篤胤の言説をおいてみると、両者の懸隔はかなり縮まる。篤胤は、日本神話の初発の神が宇宙を支配し、それゆえ皇国が世界の盟主たり得るという“創作”をおこなう。これは宣長の国学では禁じ手であつた。篤胤は宣長の後継者を自認したが、その神道観は宣長のそれを大幅に上書きしたものであつた。

⑥ 松山高吉の国学とキリスト教

松山の平田国学への親炙は深い。松山が神道について記した書『神道起源』（1893年）の次の記述をみれば明らかである。

〔原文〕 上古の日本国民は天地の主宰なる造化の神を信奉せり 〈略〉 天御中主とは天に在して宇宙を主宰し給う

〔訳文〕 古代の日本人は天地の主宰者である造化神を信奉していた。〈略〉 その造化神とは天御中主であつて、天にいて宇宙を支配しているのだ。

〔原文〕 大国主の主治する幽界は暗く穢き黄泉国と全く別にして即ち肉体の人の住むこの世の国に対する霊の国なり 〈略〉 未来の賞罰も固より大国主神の掌るところとす。

〔訳文〕 大国主神が治めるあの世は、暗くきかない黄泉国とはまったく別のものであり、我々が暮らすこの世の裏側にある靈魂の国である 〈略〉 将来の審判もこの大国主神の司るところである。

とくに注目すべきは、神道にいう八百万の神に関するくだりであろう。

〔原文〕 故に神（真の）なるもあり、人なるもあり、木石禽獸なるもあり 〈略〉 上古の史を緋けばその大半は神の字にて填められたれど上代の人はその区別をよく知れるが故に惑ふことはなかりき、崇拜する所の神は天地の主宰者なる造化の神にかざり

〔訳文〕 それゆえ本物の神もいれば、人も、木石や禽獸までも神と呼ばれる 〈略〉 このように古代の史書を緋けば至るところ神ばかりなのであるが、当時の人はその区別をよくわきまえていたので紛れることはなかつたのである。つまり古代において人々が崇拜した神は唯一天地の主宰者たる造化神だけであつた。

松山は篤胤の所説をさらに一步推し進めて、古代において神の名称はさまざまなものに冠されていて、真に人々の信仰の対象となる神は造物主すなわち天御中主のみであったという。ここまですればもはや、多神教たる神道と一神教たるキリスト教は指呼の間にあるといつてよい。そして松山は、「失われた神道」とキリスト教の類似性を説くことによって、日本にはキリスト教が似つかわしいと主張する。彼は、儒教や仏教、あるいはそれと習合した既成神道が日本人に「禍害」を及ぼしているとしたうえで、次のように書く。

〔原文〕日本は宗教の凶荒地とやいはまし、若しこの凶荒を救ふべき真宗教なくば日本数千万の精霊をいかにせん、幸に基督教ありてその失望を満たさんとす、日本固有の宗教は満面笑を含んで歓迎すべし。

〔訳文〕日本は宗教の「荒地」である。これを耕し肥沃にする真正の宗教がなければ、日本人数千万の魂は救われないであろう。しかし、幸いにもキリスト教がある。キリスト教こそは日本人の渴望を満たしてくれるであろう。そのとき日本固有の宗教はキリスト教を満面の笑みを浮かべて迎えてくれるにちがいない。

宣長や篤胤が復古の対象とした儒仏以前の真正の神道は、松山高吉においては「日本固有の宗教」と呼称される。そして、「日本固有の宗教」(≒古神道)の欠落にキリスト教をあてがうことにより、宗教不毛の地たる日本に救済がもたらされると主張する。

⑦ 結びにかえて (『キリスト教研究所紀要』への投稿論文を一部改変して掲載)

誤解をおそれずにいえば、かつて国学者であった松山高吉は、キリスト教による「復古」を唱えているのだといってもよい。もちろん、クリスチャンとしての松山は「復古」という言葉を使わない。しかしそれでも、松山が目指すものは古代の日本人がもっていたはずの豊饒な宗教心の回復であり、それは実質としては「失われた神道」の時代への回帰すなわち「復古」にほかならない。

〔原文〕固有宗教を識認し相提携して働をなさば(略)神の光栄とともに国家の光栄もあがらん。

〔訳文〕「固有の宗教」をよく理解して、手を取り合うなら、神の光栄とともに国家の光栄もいや増すであろう。

ここにいう「国家の光栄」とはなにであろうか。松山は「固有の宗教」の本質について「基本は即ち敬神なり」と書いたうえで、次のように続ける。

〔原文〕皇統の連綿たるも(略)王位は即ち天神の定むる所にして臣民の犯すべき者にあらずとの信仰上代の国民にありて遺続せしに因る。

〔訳文〕万世一系の皇統というのも、王位は天の神の定めたものであって、臣民が口出しすべきものではないという神への崇信が古代の国民にあり、それが今に続いているからである。

松山高吉のなかでは、キリスト教の信仰と天皇への崇敬の念は衝突しない。もちろん彼の念願は「日本のキリスト教化」にある。しかしそのことと「キリスト教の日本化」は松山のなかで混然としており、「固有の宗教」とキリスト教を二重写しにすることによって、キリスト教信仰が同時に皇室崇拝につながってしまうことへの危機感はまったくない。というよりもむしろ彼のなかでは、皇室崇拝はきわめて当然のこととして、キリスト教信仰と矛盾なく併存しているようである。

それは松山に限らず、明治初期の時代にあつては自然なことでもあったのだろう。しかしながら、「キリスト教の日本化」が「神道的キリスト教」を生み出し、それがやがてアジア太平洋戦争における植民地支配の肯定につながったという事実は、海老名弾正(1859~1937)や弟子の渡瀬常吉(1867~1944)らの名前とともによく知られているところである。松山高吉は自身は平和的な思想の持ち主であったが、時代の状況を俯瞰するとき、彼の信仰の立ち位置がきわめて危ういものであったこともまた否定できない。(中略)松山高吉がキリスト教の信仰をもつにあたって、かつて彼が学んだ国学はけっして否定的な媒介となっていない。むしろ反対に、松山は国学(復古神道)を学んだことによってより容易にキリスト教へ入ってゆけたのだとさえ発表者には思われる。

すでにみたように、若き日の松山高吉は平田篤胤一門の国学の学徒として、外敵であるキリスト教に近づいていった。そこでグリーンという尊敬すべき宣教師と出会えたことは、彼にとっておおきな僥倖であった。しかしそれに加えて、敵愾心をもって臨んだキリスト教の教えのなかに、彼が学んだ平田国学のそれと通じ合う内容があったことが、すくなくとも彼の敵意をやわらげる効果を發揮したこともまた確かであろうと思う。とくに篤胤による創造主天御中主の“創作”は、松山のキリスト教への接近に大きく資するところとなったであろう。(中略)

ともあれ、平田篤胤は抜群の“発明家”であり“戦略家”であった。彼の国学が明治の社会と文化に及ぼした影響は大きい。本発表ではその一事例として松山高吉をとりあげたわけであるが、彼のキリスト教入信を、国粹主義からキリスト教への回心という単純な言い方で説明することはできない。幕末期に彼が親炙した平田国学のなかにすでにキリスト教は組み込まれていた。それゆえ松山もまた明治のクリスチャンとして、天皇崇拝の影を引きずらざるを得なかった。国学とキリスト教は、一見対立するものようでありながら、実のところ平田篤胤によって予め密かにその接合が成し遂げられていたのである。

1 グリーンの葬式を番町教会でおこなったときのスピーチ原稿。大正二年九月十五日の日付が記載されている。松山家所蔵の遺稿に含まれる。未翻刻。

2 溝口靖夫著『松山高吉』(1969年)所収。

3 村岡典嗣「平田篤胤の神学における耶蘇教の影響」(『日本思想史研究』)参照。

4 子安宣邦『平田篤胤の世界』(ペリかん社)等に指摘がある。